

黒人の旅

松田好夫

一

高市黒人は柿本人麻呂、山部赤人、笠金村、高橋蟲麻呂、田辺福麻呂その他と共に伝記未詳で、日本書紀、続日本紀はもとより系図類など万葉集以外の如何なる文献にも伝記資料がない。

采詩官であつたとか、巡遊伶人であつたとするも、その実証は非常に困難である。要するに作品が総てと云へる。作品を棄てて、作品を忘れて、推定の上に推定を重ね、美しい飯空の黒人像を構想することは許されない。

万葉集に於ける「黒人の旅」について述べるに当って、先づしなければならぬことは、黒人作品の確認である。作品を離れて黒人研究、黒人論はなく、作品を離れ、「黒人の旅」もありえない。

二

従来黒人作品として扱はれた全部を、集中の順序のままに挙げれば

高市古人感^二傷近江旧堵^一作歌^{或書云、高市連黒人}

①古の人にわれあれや楽浪の故き京を見れば悲しき(巻一・三三二)

②楽浪の国つ御神のうらさびて荒れたる京見れば悲しも(巻一・三三三)

二年壬寅、太上天皇幸^二于参河国^一時歌

③何処にか船泊すらむ安礼の崎漕ぎ廻み行きし棚無し小舟(巻一・五八)

右一首、高市連黒人

太上天皇幸于吉野宮一時、高市連黒人作歌

④大和には鳴きてか来らむ呼子鳥象の中山呼びそ越ゆるなる(卷一・七〇)

高市連黒人羈旅歌八首

⑤旅にして物恋しきに山下の赤のそほ船沖を漕ぐ見ゆ(卷三・二七〇)

⑥桜田へ鶴鳴き渡る年魚市瀉潮干にけらし鶴鳴き渡る(卷三・二七一)

⑦四極山うち越え見れば笠縫の島漕ぎ隠る棚無し小舟(卷三・二七二)

⑧磯の崎漕ぎ廻み行けば近江の海八十の湊に鶴多に鳴く 未詳(卷三・二七三)

⑨吾が船は比良の湊に漕ぎ泊てむ沖へな離りさ夜更けにけり(卷三・二七四)

⑩何処にか吾は宿らむ高島の勝野の原にこの日暮れなば(卷三・二七五)

⑪妹も我も一つなれかも三河なる二見の道ゆ別れかねつる(卷三・二七六)

一本云

⑫三河の二見の道ゆ別れなば吾背も吾も独りかも行かむ

⑬早来ても見てましものを山城の高の榎群散りにけるかも(卷三・二七七)

高市連黒人歌二首

⑭吾妹子に猪名野は見せつ名次山角の松原いつか示さむ(卷三・二七九)

⑮いざ児ども大和へ早く白誓の真野の榛原手折て行かむ(卷三・二八〇)

高市連黒人歌一首

⑯住吉の得名津に立ちて見渡せば武庫の泊ゆ出づる船人(卷三・二八三)

高市連黒人近江旧都歌一首

⑰かくゆるゑに見じといふものを楽浪の旧き都を見せつともな(卷三・三〇五)

右詞、或本曰、小辨作也。未審此小弁者一也。

高市歌一首

⑱ 率おもひて漕あぎ行く舟は高島の阿渡あともの水門みなとに泊とめてにけむかも（巻九・一七二八）

高市連黒人詞一首 年月不審

⑲ 婦負めひの野の薄押し塵ちりべ降る雪に宿借る今日し悲しく思はゆ（巻十七・四〇一六）

右、伝つた誦よ此歌、三国真人五百国是也。

の九題一九首である。

これを全部認めるとしても、一往検討した結果でなければならぬ。

⑩の「一本云」に当る⑳は、はやく賀茂真淵の『考』に「是は妻の和たる哥也。然れば端に黒人哥八首としるせし中に載へきにあらず。思ふに此八首の次に高市黒人妻和哥とて此歌有つらんを、今本には脱、一本には乱てこゝに入つらん。」として以来多くはこれに従ひ、これを黒人作品から除いて来た。これに関して私も小論「潜在問答歌」〔美夫君志〕4、昭和36・10、『万葉研究新見と実証』所収）に

この歌のある一連をまとめたのも高市連黒人自身ではないらしいし、「一本」の歌を組入れたのはもとより黒人ではないところから、この両首を黒人から切り離して、本来は「問答歌」であったとも見られる。三河地方に伝誦されてゐたのが、黒人作に結びついて混入したかも知れないのである。よしや黒人作とするにしても黒人がはじめから「問答歌」として作ったとも考へられる。即ち本歌は夫（男）の立場の歌、「一本」は妻（女）の立場の歌で、黒人の妻の返した歌でもないかも知れないのである。さうすれば最初の作者は黒人でも「問答歌」として生きたことのある歌といふことが出来る。この二首を先づ「潜在問答歌」とすることも出来さうである。

と述べてゐるが、その後も両首について考へ、両首の用語、技巧の吟味から、現在では黒人の創作問答歌と見るやうになつてゐる。要点のみを云へば

- ⑪ いももわれも ⁽¹⁾ ひとつなれかも ⁽²⁾ みかはなる ⁽³⁾ ふたみのみちゆ ⁽⁴⁾ わかれかねつる ⁽⁵⁾

⑫みか(4)はの ふた(5)みのみち(6)ゆ わかれ(6)なば わが(1)せもわれも ひとり(2)かもゆかむ(3)
の如く、「いも」と「わがせ」を対応させたのみで、「ひと」「ふた」「み」「み」(三)の数詞を共に使用しながら、「もわれも」「ひと」「かも」「みかは」「ふたみのみちゆ」「わかれ」の語が両首何れにもあって、二一音節にわたって一致するのである。対応する「いも」「わがせ」を除けば、⑪は2130で70%、⑫は2128で、75%も同一なのである。別語は⑪中の九音節、⑫中の七音節に過ぎない。短歌による贈答歌、問答歌何れの場合と比較しても、相互間の密着度はその限界を越えてゐる。これは両首を同一作者が意図的に創作した場合にのみあり得ることと見ざるを得ない。この見地から『考』以来殆どの註釈書、黒人研究、黒人論から除かれてゐる⑫を、私は再び黒人作品の中に返さうと思ふ。

⑬は妻の立場の歌ではあるが、黒人の妻自身―現地妻であれ、本妻であれ―実際の別れに臨み、黒人から実際に⑫を贈られて、それに答へた歌ではあるまい。よって黒人の妻の作品は、題詞が示す如く

黒人妻歌一首

白菅の真野の榛原往くさ来さ君こそ見らめ真野の榛原(卷三・二八一)
一首といふことになる。

①②は題詞に「高市古人……」とあって、紀州本、西本願寺本、類聚古集、古葉略類聚鈔その他古写本に異同がない。下の小字の註「或書云……」の「黒」は紀州本、西本願寺本、類聚古集、古葉略類聚鈔その他「里」か、「黒」の上を「里」とし、その最後の「画のないもの」か、原字は「黒」と推定されるので、寛永版本以下の文字は正しい。それによって『僻案抄』に「高市古人は 古注に或書を引て、黒人とあるは正字なるべし。或書とは、此集の一本なるべし。前に或本歌と書、或云などかけるも皆おなじかるべし。此集第三巻にも、高市連黒人近江旧都歌とある一証也。」とし、『考』に「今本にこゝを高市古人と有はとらず、こは哥の初の句をよみ誤りてより、さかしらに古人とせしもの也、仍て一本によりぬ、……」として以来、「古人」を「黒人」とするのは定説化して行き、山田博士『講義』に「されど、高市古人といふ人無かりきといふ反証たえてなきなり。」といふやうな厳しい実証的態度も見られるが、武田博士『全註釈』に於いて「卷の九、一七一八の歌の前行には、高市歌一首とあり、かやうな形の資料を採

り入れて、この題詞の如きが出来たのであらう。」といふ説明も加はって、註釈書、黒人研究、黒人論では悉く①②を黒人作品に入れて来た。

私は更に同じく近江旧都を詠んだ三首

①古の人にわれあれや楽浪の故き京を見れば悲しき

②楽浪の国つ御神のうらさびて荒れたる京見れば悲しき

③かくゆゑに見じといふものを楽浪の旧き都を見せつともとな

を比較して感傷の姿の非常に近似してゐる上に、用語に「楽浪の」「故き京、荒れたる京、旧き都」「見れば、見せつ」のやうな一致と類似が見られることなどからも、①②を黒人作品に入れるべきであると考へる。

③にも作者について問題がある。題詞に「高市連黒人……」とあるが、左註には「右詞、或本曰、小辨作也。……」とある。これと同じ左註は

春日蔵歌一首

照る月を雲な隠しそ島かげにわが船はてむ泊知らずも（巻九・一七一九）

右一首、或本云、小辨作也。或記「姓氏」無記「名字」、或僞「名号」不僞「姓氏」。然依「古記」便以「次載」。凡如「此類」、下皆效「焉」。

にも見え、小弁の作品は

小弁歌一首

高島の阿渡の湖を漕ぎ過ぎて塩津菅浦今か漕ぐらむ（巻九・一七三四）

がある。一般論として題詞は左註、下註より成立も古く、確実度も高い。この場合は当然題詞によつて黒人作品と認め、左註は異説として扱ふべきである。①②の場合には特例であるから、それと混同してはならない。

③は簡単に「高市歌一首」とあるが、巻九には題詞の略記が多く、作者についても「山上」（一七二六）が山上億良、「春日」（一七二七）、「春日蔵」（一七二九）が春日老であるやうに、これは「高市連黒人」の略記として、黒人作品と認める。

⑩は左註に「右、伝誦此歌、三国真人五百国是也」とある如く三国五百国の伝誦した歌である。何れの本から採ったのでもない。その為用字が一字一音の仮名で

売比能野能 須々吉於之奈倍 布流由伎爾 夜度加流家敷之 可奈之久於毛倍遊
となつてゐる。これは現地に伝誦してゐるのを、越中守在任中大伴家持が三国五百国の口から、直接聴き取つたのであつて、黒人の用字とは無関係であらう。

以上によつて黒人作品として、①②③④⑤⑥⑦⑧⑨⑩⑪⑫⑬⑭⑮⑯⑰⑱の九題一九首全部を再確認する。

三

黒人が人麻呂と同時代であつたことは、③④の題詞によつて知られ、第二期の歌人として人麻呂と併称されてゐたことは、卷一雑歌の「藤原宮御宇天皇代」に

過_三近江荒都一_時、柿本朝臣人麿作歌（二九、三〇、三一）

高市古人感_三傷近江旧堵_二作歌（三二、三三）

が並び、卷三雑歌に、少し距ててではあるが

柿本朝臣人麻呂鬪旅歌八首（二四九—二五六）

高市連黒人鬪旅歌八首（二七〇—二七七）

の二連が、作者名の他は、歌種、歌数を同様に並べ揃へた形で入つてゐることで知られよう。

しかし文学史的には、鬪旅歌の展開が、人麻呂↓黒人↓赤人となるのであつて、人麻呂の次の時代を負ひ、人麻呂と赤人の中間に位置するのである。

その作品は悉く鬪旅歌、旅の歌であつて、その旅先を国別に地名を示すと

①近江（楽浪）

②近江（楽浪）

③三河（安礼の崎）

- ④ 大和 (大和、象の中山)
- ⑤ ———— (———)
- ⑥ 尾張 (桜田、年魚市湯)
- ⑦ ———— (四極山、笠縫の島)
- ⑧ 近江 (近江の海)
- ⑨ 近江 (比良の湊)
- ⑩ 近江 (高島、勝野の原)
- ⑪ 三河 (三河、二見の道)
- ⑫ 三河 (三河、二見の道)
- ⑬ 山城 (高)
- ⑭ 摂津 (猪名野、名次山、角の松原)
- ⑮ 摂津 (白萱、真野の榛原)
- ⑯ 摂津 (住吉、得名津)
- ⑰ 近江 (楽浪)
- ⑱ 近江 (高島、阿渡の水門)
- ⑲ 越中 (婦負の野)

にならうか。

③には遠江説その他もあるが、「安礼の崎」は三河湾内に考へなければならぬ。その何処にも得られぬ場合にのみ、三河以西で、持統上皇の三河御幸に關係があり、しかも海に面した尾張か伊勢、即ち伊勢湾内に求むべきであらう。

⑤は黒人作品中地名のないただ一首であつて、三河説もあるが、⑤⑥⑦⑧⑨⑩⑪⑫⑬一連の排列が、黒人の手によるものでなく、黒人の旅の行程とも、又地理的關連とも無關係であるから、三河に定める根拠がない。

⑦には諸説があり、中でも三河説、摂津説、そして近江説は強く主張されて来たが、何れも認め難いことはすでに

小稿『万葉集「四極山」「笠縫の島」の論—三河説、摂津説など併せ疑う—』（『日本文学』、8・5、昭和34・5、『万葉研究新見と実証』所収）で詳論した。

⑧の近江であることは「近江の海」で明らかであっても、第一句を特に「磯崎を」と訓んで湖東の坂田郡磯崎村ではなく、後でもいふやうに、湖西に求むべきであらう。

これを更に国別にまとめると

畿内 大和 ④

摂津 ⑭⑮⑯⑰

山城 ⑬

東海道 尾張 ⑥

三河 ③⑪⑫

東山道 近江 ①②⑧⑨⑩⑰⑱

北陸道 越中 ⑬⑭

⑤⑦

となる。黒人が実際に旅したのがどの範囲であるかは、知り難いが、作品は不明の⑤⑦を除いて七国にわたってゐる。持統、文武両朝に仕へたのだから、京のあつた飛鳥、藤原地方に住居を持ち、そこを出発して行幸に従ひ、公用の旅にも出たであらう。

摂津、山城は大和の隣国であつて、大和から西に行けば摂津、北へ行けば山城である。しかし尾張、三河に出ようとすれば、伊賀、伊勢を通り、海路をとって尾張或は三河に入るか、陸路を美濃に出て尾張に入らなければならぬ。山城、近江を経る場合にも、美濃に出て尾張に入ることになる。又越中に行くには当然山城、近江を通り、越前を経なければ到達出来ない。

さうとすれば黒人が必ず往復通過した筈の伊賀、伊勢、越前の作品が一首も見られないのはなぜであらうか。これもまた文学の外側の問題でなく、文学の内側の問題、即ち文学それ自身のことであらう。

一体、旅の歌の形成には、前提として離郷感が必要である。離郷感とは時間的、空間的、自然的、社会的など様々な傾向を持つ。故郷に郷宅に、或はある時代に結びついてをり、それを起点とし、それと比較しての距離感である。しかし生の離郷感ではまだ詩歌の母胎とはなり得ない。離郷感が情緒となって、旅愁、旅情、旅心を伴はなければならぬ。それが表現されて羈旅歌、旅の歌が形成されるのである。それを実際の旅、現実の旅と混同すべきでなく、作品はあくまで非現実な芸術的世界である。

そして羈旅歌、旅の歌の典型には、作品中に作者の位置、行動の表現——顕在的であれ、潜在的であれ——を必要とする。黒人作品はまさに羈旅歌、旅の歌の典型と云へようか。黒人を羈旅歌人、旅の歌人とするのは、羈旅歌、旅の歌の作者であるからではない。羈旅歌、旅の歌の典型を残したからではない。旅での作品が必ずしも羈旅歌、旅の歌ではないのである。

さて黒人作品に大和の歌は④一首しかない。持統上皇の大宝元年(701)六月二日から七月一〇日まで、朱鳥三年(689)以来第三二回目、上皇最後の吉野御幸に従っての作品である。同じ大和の内ながら、吉野は「吉野の国」と別称される程で、藤原宮からすれば十分の離郷感が成立するのである。ここでは人麻呂の名作も生れ、黒人以後には金村、赤人の歌も出来るが、それらは羈旅歌、旅の歌の典型とは云へない。

黒人はただ一首ながら羈旅歌、旅の歌を作った。「大和」と「象の中山」に、「呼子鳥：呼びそ越ゆる」に離郷感が溢れてゐる。大和国原の作品の全く無いのは日常生活してゐる土地では離郷感などあり得ないからである。これにより、黒人が純乎たる羈旅歌人、旅の歌人であることを示してゐる。

大和の西隣である摂津の歌は⑭⑮⑯三首である。⑭の「猪名野」「名次山」「角の松原」に空間的、自然的離郷感による作品形成が見られ、⑮の「大和へ早く」「白菅の真野の榛原」、⑯の「住吉の得名津」「武庫の泊」にもそれがあり、「何時か示さむ」「立ちて見渡せば」には行動が、「出づる船人」には無限に連なる離郷感が見られる。

大和の北隣の山城も何度も往復してゐさうなのに歌は⑰一首しかない。「山城の高の槻群」に離郷感がある。「高」

(多賀)は木津と宇治の中段で、道は宇治川に沿ってをり、集中に「宇治」「宇治川」の歌が多いのに、黒人にはその作品が全くない。

尾張の歌は⑥一首である。「桜田」「年魚市瀉」に離郷感が、「鶴鳴き渡る」には無限に連なるそれが溢れ、その繰返しによって高い格調を創ってゐる。この一首から赤人の作品(巻六・九一九)、聖武天皇御製(巻六・一〇三〇)も生れた。尾張の東隣の三河の歌は⑨⑪⑫三首である。⑨は持統上皇として最後となる大宝二年(702)一〇月一〇日から一月二五日までの三河御幸の「時」の作品であるが、御幸に従つての作か、御幸の時在任しての作かは不明であり、⑪⑫の御幸との関連も明らかでない。「安礼の崎」に、これをはさんだ「何処にか船泊すらむ」「漕ぎ廻み行きし棚無し小舟」に無限に連なる離郷感が溢れ、⑪⑫は「三河なる二見の道ゆ」「三河の二見の道ゆ」に離郷感、「別れ」には社会的なそれが見られる。前にも述べたやうに「ひと」「ふた」「み」と「一」「二」「三」の数詞を詠み込んだ黒人作品には珍らしい技巧的な一組で、場面を想定しての戯歌とも見られようか。他の作品にはない別れに遊ぶ明るい一面が出てゐる。黒人の創作問答歌と見るべき理由でもある。

近江の歌は①②⑧⑨⑩⑪⑫⑬の七首もあり、近江の歌人、湖の歌人とさへ云ひ得る。この内①②⑪⑫は大津京址、⑨⑩⑬は湖西の歌、そして④⑤⑥は湖西に沿ふ湖上、⑦は湖西の陸上の旅である。⑨⑩は唐崎を出ての北行、⑪は北行か、南行か定め難いもののはり北行ではないか。黒人の近江の旅は二往復が考へられる。一往復とすれば、往路は湖上、帰路は陸上といふことになり、⑩は帰路即ち南行としなければならぬ。⑧の初句を「磯の崎」と訓み、普通名詞とするのが正しい限り、すでに述べたやうに、その歌碑までもある湖東の坂田郡磯崎村に結びつけることは無理で、歌の中にそれを示す地名は無いもの、湖西に沿ふ湖上の作として⑧⑨⑩を連ねて味ふべきであらう。①②⑪は「楽浪」に離郷感も見られるが、「故き京」「荒れたる京」「旧き都」に天智天皇大津宮時代を起点とする時間的のそれが中心をなしてゐる。①②の結句にある他の黒人作品に例の無い主観語を含む「見れば悲しき」「見れば悲しも」は、人麻呂の長歌(巻一・二九)の結句「ももしきの大宮処 見れば悲しも」の影響と見るべきであらう。行動も①②の「見れば」、⑪の「見せつつ」にある。湖上の作⑧⑨⑩は「近江の海八十の湊」「比良の湖」「高島の阿渡の水門」に、「漕ぎ廻み行けば」「漕ぎ泊てむ」「率ひて漕ぎ行く舟……は泊てにけむかも」に無限に連なる離郷感と行動がある。

越中の歌は⑨一首で、三国五百国の伝誦歌とあるもの。「婦負の野」に離郷感、「薄押し靡べ降る雪に」に近畿と北陸の自然的なそれが見え、「宿借る」に行動がある。結句「悲しく思はゆ」に①②と同じく主観語を含む。①②の旅と連なり、共に初期の作品かも知れない。

不明の⑤⑦二首の内、⑤に「旅」の語があり、又地名が全くない。黒人作品には珍らしい一例である。「物恋しきに」主観語のあることも①②と共に注意すべきであるが、⑦の「四極山」「笠縫の島」に離郷感が見え、「赤のそほ船沖を漕ぐ見ゆ」「島漕ぎ隠る棚無し小舟」には無限に連なるそれが溢れ、⑦の「うち越え見れば」には黒人作品中最大の行動表現がある。

五

以上によって黒人の羈旅歌、旅の歌の素描をして見たが、黒人作品には長歌が無く、短歌のみで、文学史的には人麻呂、赤人と並ぶ重要な位置を占め、多くの地名を離郷感をこめて詠み入れ、羈旅歌、旅の歌のみを残した。しかも秀れた羈旅歌、旅の歌の典型を創造したのである。

近代の歌人木下利玄の第二歌集「紅玉」(大正8・7、玄文社)の内容は、大正三年(1914)から六年(1917)まで、旅行につぐ旅行の間の作品を集めてをり、「集の末に」中にも「この集の歌の大部分は、その旅中の作である。」とあるが、五二〇首中、旅の歌は殆ど無い。旅中の作品必ずしも旅の歌ではないのである。これは注目すべきことで、小稿「木下利玄」(『日本歌人講座』7、昭和44・3、弘文堂)の中でも「旅の所々に於いて、自然、事象、人間などの動態を精細にとらえることに全力を傾け、旅する自らを詠歎していない。即ち一首一首の作品の中では旅をしていないのである。」と指摘したが、利玄の眼は対象に迫って、離郷感の入る余地はなく、旅愁、旅情、旅心を殆ど伴はず、地名も題や題詞には豊富に入れながら、作品中には極めて乏しい。

黒人の羈旅歌、旅の歌の特質、その典型は利玄の作品との比較に於いて一層鮮明にすることが出来るのである。黒人は旅の歌人であり、利玄は非旅の歌人である。黒人は作品の中で旅をしてゐるが、利玄は作品の中で旅をしてゐない。黒人は自然、事象、人間を旅の目で見てゐるが、利玄は旅中でも非旅の目で見てゐる。